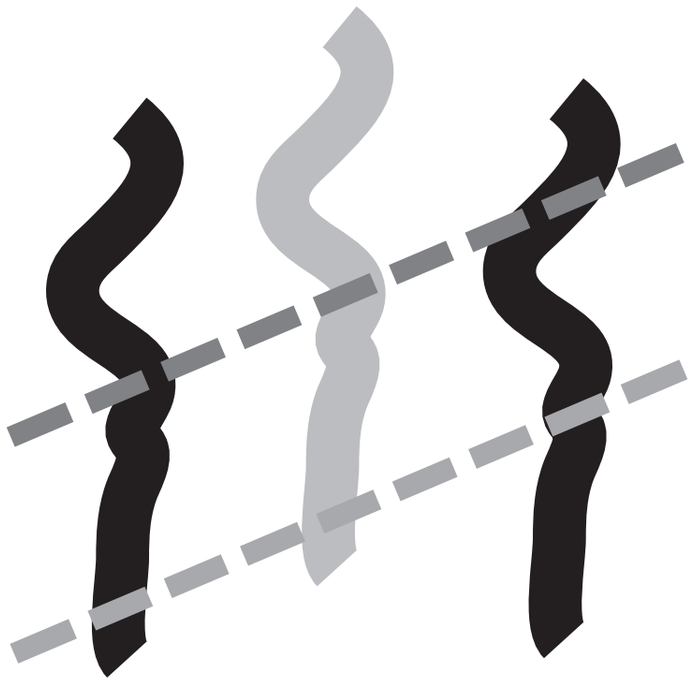
月　　刊

# Mélange

VOL.92



2014.06.22

詩と評論

月刊「Mélange」VOL.92　2014/06/22

月刊「Mélange」編集部

「月刊めらんじゅ９２号目次

## 詩＆川柳


川柳連作　喋喋喃喃…神神は囁く ……情野千里　03
直線（ぜったい） ……中堂けいこ　03
かみ ……上野 都　04
Rikuへ ……にしもとめぐみ　05
麦秋 ……岩脇リーベル豊美　05
段丘……福田知子　06
今日を記すだろう／耳 ……川田あひる　07
約束(改稿)……寺岡良信　08
かくも長き不在の果てに ……有時秀記 09
Odeur ……月村 香　12
特殊物語生成譚 ……千田草介　13
トノサマガエル ……中嶋康雄　14
1　朝一夜。（液体のミミック） ……高谷和幸　15
化身 ……大橋愛由等　16
夜のうしろでちかちか光っていた……富 哲世　17
歩行非行……大西隆志　18
遊泳註解……大西隆志　19


## エッセイ


<詩人通りより>14「六月という月—聖霊降臨」……岩脇リーベル豊美　10
**連載第4回**／HANAだより 〈アレントの『思索日記』Ⅰ、Ⅱ巻〉……中堂けいこ　11
<神戸詞(うた)あしび>81「そして島民は殺されてしまった」……大橋愛由等　20


編集部だより★13／四年連続となるのです。この人の声を聞かないと六月を迎えた気がしなくなる、とさえ思うようになりました。月例の「Melange」読書会のスピーカーとして詩人・平岡けいこさんをお招きいたしました。テーマは、「レオナルド・ダ・ヴィンチに教わる経験至上主義」。毎年のテーマをみていると、平岡けいさんがその一年間にどのような事象について関心を持ってきたかがわかり、興味を引かれます。／「月刊めらんじゅ」詩友の木澤豊さんの第七詩集『かもめホテル』の出版記念会が6月15日に大阪で行われました。木澤さんの柔和な性格がそのまま反映したほのぼのとした良い会となりました。詩集発行後も作品を書き続けてほしいものです。(大橋記)

◆川柳連作

# 喋喋喃喃…神神は囁く

情野千里

葦牙のよじれこすれて曲(うた)となる
成り合わざる処が私にみつよっつ
私の産んだ蛭子の陽気なステップ
世界一周しようと葦船が誘う
二の膳はえをとこえをとめの順
ころころと有無有無と生む嶋も神も
自分を誉めてやるみほと炙かれいて
ペットボトルに黄泉つ国なる美味し水
視たわねとうじいかづちを祓いつつ
黄泉つひら坂へ急ぐ桃売りのワゴン
筍は引き抜きにくい醜女の深情け

◆直線（ぜったい）

中堂けいこ

二つの点を結ぶ直線の定義とは
二つの点の離れ方より
もっともみじかいことの方が大切なのだと
わたしは直線を体に持たないので
みじかさはまっすぐと同義的におきかえられて
あなたはまっすぐにたっていなさい
と
だれもいない校舎の廊下で
直立不動
わたしは体の中に
先生に言われたとおり
忘れ物を探し続けている
祖先のだれかが妄想した
ありえない（ぜったい）
まっすぐな線を
祖先のだれかは独り言の前に見つけてしまったらしい
二つの点を分かち
分別は平行線と矩形と（ついでに円も）
わたしは背中が痒くて
柱に肩甲骨をこすりながら
大人になっていった
いつかわたしの骨をみた人は灰のなかに
細っこい定規を見つける
それは先生が命じただれもいない廊下で
分かち続けた二つの点の間をつなぐ
なにかよくわからない最後の
みじかさなのだろう

## ◆かみ

上野　都

わたし　と　打ち込む
変換キー
私　と出てくる

そこに　白いものが
ぺたりと張り付いていて
かみ　のような
かみ　ではないような

臭うだろ　遠い西の大陸から飛んできたやつ
聞こえるだろ　隣の部屋のテレビ
ただ座っているだけなのに
変換しなくちゃならない理由(わけ)の

爪を立てることも
血を流すこともない
今夜も　ひとのかたちになりたいだけ
うしろから不意撃ちを食らうこともなく

命綱を結んで洞穴の奥へ

野放図な変換キー
待っているものがすぐに出てくる
待っているものはすぐに消せる

百回死んでも恨みは晴らせない　と
戯れに書いてみる
ぎゅっと絞る太い手が
私の顔を握りつぶす
でも　痛くない
薄汚れた石筍
一センチに百年　千年
へし折る手もない風の抜け道

地下の水脈は枯れても
昨日と同じ白さで
私に張り付く入り口

かみ　のような
かみ　ではないような
やっぱり　痛くない
誰もさわれない
許してくれなくてもいいから。

## ◆Rikuへ

にしもとめぐみ

こかまきり
黄緑色の妖精
白い花が散る中を
飛んでゆく

小さな空を
覗いてみる

初夏の日差し
天上の蝶々のまどろみ
スターバト・マーテル
うす明るい方へ

群れの中から
こぼれ落ちてしまった
小さな命

## ◆麦秋

岩脇リーベル豊美

見渡すかぎり麦秋
ぽつんぽつんと雛罌粟が燃えている
風に流される漣が輝きを増す

今日はいち日を穂刈りで暮した
いっぽんの泥道が
平原をふたつに分けている

農耕馬の上半身は
風と霊となり緩やかに彼方に進み
凛然と双曲線の地上画を描く

馬上のひとは
統一計画もなく拡張するポストモダン的地平を避けて
ポストということに安らぎを覚えながらも
狂暴な飛沫を浴びさせてきた
往時の夜々の寂寥を偲ぼうとする

牛馬の匂いの消えない部屋で
毛布にくるまっていると
干乾びた天使が福音を届けにくるはずだ
今朝そのために林檎を削った
愛くるしい雌馬の放つ福音が

## ◆段丘

福田知子

雨
さざめく
はらの底
柘榴の実が
雨の血をとどめる街路に
わたしはでてゆく　でかけてゆく
なまあたたかい有機物のにおい
肩に降りてくる残留物の重み
深呼吸するほどに　ずしり
体積を増してくる雨　柘榴
巨大化した眩しい受苦が
階段を降りてくる
雨ざらしの祠
言葉の階は
段丘

泉も
湖も
海も
逃げ場を失った



## ◆今日を記すだろう

川田あひる

汗だくで
光る雪の結晶を
見つめた
崩れそうなふもとにいる
独り

ひいひい
雛が近づいてくる
ひいひい
輪をかき　近づいてくる
親鳥もくる
食い込み
交わりたいが
翻り
行ってしまった
貫をまわりこんでも
遠い
葉脈のうえを
細い足でたわむれている
遠い
親子に遠い

だから　消して
音たててひらいたひとつの
白い花を描く

だがどうだ
決してそこでやめない

炎天のビルディングの影もない道をずんずんと
干上がった茂る川を下り
石橋をくぐり
潮溜へ
ゆきつく

手のひらに
ちいさな生きものを這わせ
くすぐったさの限界まで
いつくしみ

髪ちぢれながら
逝ったひとをおもい
去ったひとを忘れ

目前を
一年の
命が
翔びゆく

わたしは今日を記すだろう

彼方　沖に
詰襟姿の
自転車が走る
むぎわら帽子の少女をのせて
走る

ところで　きみ
帰ってくるのか

## ◆耳

川田あひる

声高らかな日も
呟きにしかならない日も
祈るわたしの声を

聴いてきた
神さまに
訴えた　さびしさ
かなしみ
願いを
聴いてきた
潮の匂いする
ひとすじの
金属線が絶え間なく震え
わたしを　証する
ああ、生かされてあるなんというぜいたく
夕暮れて
部屋のすみっこで
目を閉じ
手を合わせる
きょう、プルシャンブルーを見ました
この国に
産まれて
ありがとうございます
遠浅に
さくらの　貝
裏切ることのない
耳

## ◆約束

寺岡良信

海が燃える
波頭が燃える
牝馬の初潮とともにめぐりくる
この五月に

グノシェンヌを弾く
サティの夜はつめたい
月桂樹につたふ雫はつめたい
クノッソスの丘に
ささやく雨となつて
夜明けの群落を慰めつづけた私の
最期のひとつぶに
溪流は約束をした

水は虹の魚を身ごもるだらう

無垢な生き物たちだけにくる五月
蒼い残響でのみつながる
空の回廊
もうおまへは
人へは戻らない



## ◆かくも長き不在の果てに

有時秀記

《その街》で独りさまよう画家の描く絵は、痛みを、見るものに与える。《その街》からの視線は、画家の心に痛みと傷をもたらし、カンバスには岩肌のような、かすれた色が、幾種類か、無造作な引っかき傷のような痕跡を残している。

見るものに与える痛み、それは、画家の、いわく言い難い心痛であり、また、ある個別的事象を因とする心的外傷である。しかし、カンバスを眺める者は、ただ、痛々しい絵画だ、と感じるだけである。いわく言い難い心痛や、個別的事象による心的外傷は、容易には明らかにならないのであり、画家本人すら、その原因を知るのは、なかなか困難なことである。

カンバスを眺める者とは、《その街》を通りすぎるものだが、彼らは、画家の指し示している二つの、《痛み》と《傷み》の真実性を知ることはなく、ただ、表層の痛み一般を知ることで、〈知った〉と錯覚している。

しかし、画家が色彩の探究を行なうのは、あくまでも、言い難い心痛と、心的外傷の真実性を知るためであり、そのため、色彩の混乱期から、みずからを脱出させることができないのである。

岩肌の引っかき傷のような混乱した色彩。画家は、これら幾種類かの色彩の痕跡に呪縛されているのを知っているが、この混乱期を経て、あるべきものの、長き不在を感じた果てに、幻視の花を見いだすのである。

麗しい幻視の花は、長き不在の果てにしか、見えないものである。言い難い心痛と、心的外傷の真実性が、実存の原石をかたどる。《痛み》と《傷み》の色彩を包みこむような麗しい幻視の花。くれない色の冠が画家の心をなごませ、言い難い心痛と心的外傷は、真実性に富んだ実存の領域に沈んでいるのである。麗しい紅色は、この領域のなかで、画家の心をなごませ、やがて《痛み》と《傷み》の二重奏が聴こえると、静かに冠の頭頂部に麗しい紅色を塗り足し、画家は喜びの表情を見せるのである。かくも長き不在の果てに。

詩人通りより／13

# 六月という月―聖霊降臨

岩脇リーベル豊美

六月という月は、「黄金の十月」と並んで、一年でもっとも澄んだ月だ。そして、いたるところで収束に向けての混沌や、それらが止揚されてゆくような感が漂いながら、もっとも解放的な月でもある。

聖霊が降り立つ日は、春分後の最初の満月の次の日曜日が復活祭の日曜日である。グレゴリオ暦では、復活祭は、年によって三月中旬から四月下旬というひと月ほどの周期でずれて訪れるような移動祝日であるから、それに相応して、四十日後がキリスト昇天の祝日で、五十日後がこのペンテコステといわれる聖霊降臨の祝日となり、五月中に巡ってくることのほうが多いような気がするが、六月であることもあり、今年は六月八日の日曜日だった。キリストの復活・昇天ののち、エルサレムはシャブオットのユダヤの祭りに集まり祈りをささげていた百二十人の信徒たちの上に、神からの聖霊が降り立ったという出来事を祝う祝祭日であり、この日付は、教会の基盤としてキリスト教の伝統の中で理解されるであろう。バイエルン州の学校などは、八月初頭に夏休みが控えているというのに、毎年二週間の聖霊降臨休暇となる。

新約聖書『使徒行伝』における祈る弟子たちに語られる箇所が、詩人には、むしろ、翻訳をするものには興味深いと思っていた。突然激しい風音が響き、「舌のようなものが、炎のように分かれて現れ、ひとりびとりの上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、いろいろの他国の言葉で語りだした。(2.3-4) エルサレムには、天下のあらゆる国々から、信仰深いユダヤ人たちがきて住んでいたが、[…]彼らの生まれ故郷の国語で、使徒たちが話しているのを、だれもかれも聞いてあっけに取られ[…]言った。『見よ、今話しているこのひとたちは、[…]わたしたちの国語で、神の大きな働きを述べるのを聞くとは、どうしたことか。」新しい酒で酔っていると口々に言われるなか、ペテロは神の言葉を詠み、「上では、天に奇跡を見せ、／下では、地にしるしを、／すなわち、血と火と立ちこめる煙とを、見せるであろう。／主の大いなる輝かしい日が来る前に、／日はやみに／月は血に変わるであろう。／そのとき、主の名を呼び求める者は、みな救われるであろう」(2.5-21)と、語る。さらに人々に「この曲がった時代から救われよ」(2.40)とイエス・キリストの名によってバプテスマを受けることを勧める。ペテロは「神は人をかたよりみないかたで、神を敬い義を行う者はどの国民でも受け入れてくださることが、本当によくわかってきた。」(10.35) と語るが、「預言者たちもみな、イエスを信じる者はことごとく、その名によって罪のゆるしが受けられると、」(10.43?44) 証しを示すことで、聖霊がくだる。異言で神を賛美する異邦人たちにも同じく聖霊の賜物が注がれる。このような『使徒行伝』にある、ペテロをはじめとする使徒たちの、異言語で他者と話し、他者を理解する能力は、「ペンテコステの奇跡」として描かれるが、神学的に見ると、これは伝道に関し、国籍や民族を超えて、あらゆる人間に対する呼びかけでもある。そして、それは聖霊として遣わされた言葉そのものなのである。

春、謝肉祭が終わり、復活祭までの受難の時期には、現代のほとんどの人間が特に断食をするということもなくても（後頭部あたりには食事の節制があったりするが、思い起こせば、ダンス禁止令もあるし、えっ？　現代にも？　と、初めて聞いたときは驚いた）、国営テレビなどには、時折、血を流したイエズス像が現れ、レクイエムが流れ、復活の祝日にも犠牲の子羊の肉が供される。淡々と日常生活を送っている限りは気にはならないが、日常の根底には血の匂いが流れている気がしてならない。そのような空気に、六月の至点に向けて、「初めに言があった。言は神と共にあった。」ではじまる『ヨハネによる福音書』の箇所を見ると、聖霊という意味の語が「風」と「霊」の二重の意味を持たされている。なんと爽やかで、鮮明な印象となるではないか。

「誰でも、水と霊から生まれなければ、神の国にはいることはできない。肉から生まれるものは肉であり、霊から生まれるものは霊である。あなたがたは新しく生まれなければならないと、わたしが言ったからとて、不思議に思うには及ばない。風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞くが、それがどこから来て、どこへ行くかは知らない。霊から生まれるものもみな、それと同じである」(3.6-8、以上の引用は渡独時スーツケースに入れ、持ち込んだ『聖書』日本聖書協会、東京1954、1955より）と語られている。

今年の聖霊降臨休暇は、ちょうど二十回目の結婚記念日や、その配偶者の誕生日が重なり、ローマ神話のジューンブライドのことや、六月の気候のことや理由はいろいろあるのだろうが、学校の休みと職場の休みとは異なり、ほんの数日ではあったが、スイスはグリンデルヴァルトに行き、山の澄んだ空気を楽しんだ。「聖霊が降り立つ」のは、こういう場所であるかという感覚と、「新しく生まれる」いう言葉の象徴をいくぶんか意識しながら。



# アレントの『思索日記』Ⅰ、Ⅱ巻

二〇〇六年に法政大学出版部から出され、私はⅠ巻を初版で購入。以来、いつも机の片隅においている。煮詰まったときなどにこの分厚い本をぱっと開く。開いたページがそのときの私へのメッセージなのだ。世界の構造に対するちょっとしたきっかけ、ひとつの概念を鋭くもわかりやすくことばに置き換えてみせる。通読するにはテーマが散在しどこまでもハンナ・アレントの思考の断片にすぎないのはわかるし、本来は著作にあたるのが筋だというのはわかっていた。ただ私は研究者ではないし趣味でおっかけているわけで、絵空事のような詩ばかり書いているとどこかで現実社会の地に足を着けて考えてみたくなる。（詩を書く）行為は地面から一〇cmくらい浮いたところに立っているみたいなのだ。『思索日記』を開くとガツンとカツをいれてくれる。

「そうよ、ものごとはこんなふうに考えるのよ！」

テキストはもちろんカント、ハイデガー、プラトン、アリストテレスからマルクス他から引用され、アレントは彼らを話し相手としながら（根源的悪）（真理）（労働）（道徳）（理性）等々を哲学的方法で解釈する。

今回Ⅱ巻も購入したが、相変わらず初版一刷のままでしかも古書のほうが高価だった。どちらもアレントの死後、ノートメモだったのを編集して出版。一九五〇（『全体主義の起源』発刊後）から一九七三年の晩年まで続く。Ⅱ巻はアレントが亡くなる前のカントノートが付いていてお得感はある。

## ＨＡＮＡ便り 04

一九五〇年六月〔1〕から抜粋要約。…人の犯した罪の重荷を取り除けるのはキリスト教的には神だけである。人と人の間で赦しが起こるのは異質なもの同士で報復を断念することが前提になる。しかし和解は出来事を受け入れるところで起こる。和解は他者の重荷をともに担うのだ。ここで平等が再建される。和解は不平等を作り出す赦しと対立する。赦しと報復は正反対だがつながっている。赦す者が報復を断念するのは自分にも罪があるかもしれないからで報復する者が赦そうとしないのは自分も同じことをするかもしれないからだ。原罪の観念から生まれる負の連帯である…

要約が適切かどうか。これは『思索日記』Ⅰの冒頭だ。シオニズム運動と距離をおき、戦後初めて渡欧して二人の師、ヤスパースとハイデガーに再会。再び政治哲学への情熱をとりもどし思索ノートをつけはじめる。

私には自分に理解できることしか読めない。年を取ることの効用のひとつはわからないことはさっさと捨て去る、その覚悟と間違いを犯す可能性が同等にあつかえることだ。

一九六五年五月〔五四〕

私は七歳のときからいつも神に関心があったが、神について考えたことはない。

もう生きなくてもよければなあとよく思ったが、人生の意味への問いを立てたことはない。

自作の詩篇も収まっている。詩では心情が洩れているがテキストは理性が勝ってどこまでも現象学者である。ぱっと開いたページは「今の私」に珠玉の共時性をもたらす。

中堂けいこ

## ◆ Odeur *

月村香

あの人のつける香りはいつも一つの単語で
実にわかりやすいしかも興味をそそられる
のは並べてある題名を一目すればすぐにわ
かるもう一つ似たような印象を受けたのは
彼らのうたうただがそらんじているうち
に急に柑橘系に似た匂いを放つことがわか
る両方に共通しているのは突発性の香りで
あり何もしない手を軽蔑するひとつの動機
であるそしてわたしに言えることはもっと
体を鍛え耳と鼻を過敏にするということあ
れとこれがいつまでも争って対峙している
芳香のためにくっつきはしまいか妥協か

* Odeur=オヴール、香り



## ◆ 特殊物語生成譚

千田草介

今日の頁はどこですかと井戸掘り妊婦にた
ずねたのは人夫という語がどうしても変換
で出ず妊婦になってしまったからである。
仕方なしに妊婦といっしょに井戸を掘る物
語を書きつづけるしかないなという諦念を
いだきつつ頁をめくってマッチを擦ると、
白い頁があぶり出しになって書いたおぼえ
のない神聖文字の列がうかびあがる。それ
らの字という字はそれぞれ生命をもってい
て共食いをしたり交尾したり出産したりし
ながら見えざる手によるかのようなフォー
メーションをつくったりくずしたりする。
そこへ月満ちて妊婦が生んだ子どもが登場
して神の代理人なのか悪魔なのかわからぬ
ふるまいをするので、どうもこいつはおれ
の胤ではないようだから退治してやろうか
と思い、その大仕事のために必要な段取り
やら道具やら加勢の者らの顔ぶれを考えて
いるうちに頁が勝手にめくれて攻守ところ
が変わり、敗色おおうべくもない絶体絶命
の窮地に立たされ、後生を願いつつ別の井
戸を掘って水脈をさがすのである。

## ◆トノサマガエル

中嶋康雄

濁った泥の目に
高貴の兆はない

緑と茶褐色の縞模様の裸の肌を保水するには
細かい茶色のひび割れが線虫状に走る発泡スチロール上で延々と
甲羅干しする無紋の異端者を見下しながら
干上がった池のほんの片隅に群生する
ドクダミの葉のわずかな陰
臭い陰に
じっと身を潜ませ
歌うことすら止め
夜の間微動だにせず
身体の襞という襞に微かな夜露を染みこませ
朝
逆立ちをして
素早い蒸発と競争して
落ちる滴を一滴でも多く啜りながら

もう降らない雨を待つしかない
美味そうな肥った蠅は
ドクダミを嫌い
ドクダミからは遠い

アスファルトの上を
夜とぼとぼ歩く幽霊のように
種は失命にさらされている

どこにでもいるはずで
もうどこにもいない

どこにでもいるはずで
もうどこにも
いない

無紋の異端者とドクダミの矮小者を除き
原色図鑑にのみ
とり残されつつ

今も蠅を追う
残照の気配



## ◆1　朝一夜。（液体のミミック）

高谷和幸

骨である経験がむっつの月をかぞえる。その月に、庭に植えていたあなたがもちこたえられなくなってこぼれ落ちていった。あなたはn個のあなたを作り続けて、残ったn個のわたしでわたしの庭を汚している。記憶から消えることで数字になる古い両脚や五指がここにある。その二分木（binary tree）のノアールの、あるべきものの片方を欠如している「世界のちっぽけなかけら」がさみしいのです。粘土の表面を引っ掻く、線になる文字（混ざりあった者よ、と声をかけられた）に古いひとの技巧が白いスクリーンのようにひろがる。ぽっきりと折られた擬態、そもそも混ざりもののあなたを模倣することなどかなわなかったのだろう。新しくかぞえるあなたには、「はじめから何もなかったのだから」口をあけると、舌の湿り気にくじけた気持ちになる。――（黄色い落とし花にそまり）――「いつかはわたしがオリジナルのわたしになれるだろうか」と、相依性を道すじにして、食人物語の食われた人の、「根」におろかしく摂取されてもいい。あからさまに数字を読む。口をとがらせ耳を澄ませて、あなたの本当の目的をさらけだす文字のはだかを読んでみなさい、触れてみなさいと。今朝のひとつの空は、むっつの目の空から眺められる空の１６０億個の相加するノアールに充満するn数がいっぱいになり、求積法のわたしたち（まるいものを四角に変える）からあふれて、液体のようにもちこたえようもなくこぼれ……。夢に見た朝は、踏みつけられても生き生きとした文字が四五本か、空にまっすぐにのばしていく、「色あせない透明のこえでした」。いつかはわたしがオリジナルのわたしになれるだろうか。ミミックの朝は、庭のわたしに「＊＊＊＊」などしるしをつけて、鼻の奥にあつまった「むっつ、むっつ、むっつ、むっつ、むっつ」と音像にするたびに口からノアールがこぼれ落ちていく。まひるになるころには、日傘をさして、黒鞄を提げ、いつのまにかあなたは三十歳にもどっている。

## ◆蛇行して

大橋愛由等

またたくまに周りからひとが消えてまばたきしている間に残っていたひとも去るだろうと思いなしていたところひとり残っていた者が「シャクナゲの根によく言い伝えておいたから」と耳元でささやくのを聴きながらこれからもここに坐りつづけようとひとりがたり

いつから眠っているのだろうと問う者もまた眠りに堕ちてしまったので眠りの深度を測れないままに早朝を迎えようとして昨夜食べた瓜の漬物に睡眠作用があったのではないかと分かりかけていたころに今朝も誰かがメイルボックスに沈黙をコトリと入れる音

今日はベランダで詩片を焼こうとふたりで決めていたのだけれど風の根が変わりはじめて蛇行する六月の雨がためらいを呼び言葉が文法に従わなくなって訳語と訳語とが密約を交わしたのか意味を拒みはじめたのでせっかく黄紙に刻した詩片を握りしめたまま

やがていつのまにか聞こえてきたバラードEstrellitaに四肢をゆだねているうちにゆるゆると刻は進み(デウス・エクス・マキナはおそらくいやきっとやって来ない)と座りつづけて梅雨空をながめながら尻尾だけ見せて通り過ぎるメス猫をみとめていたその日



## ◆夜のうしろでちかちか光っていた

富　哲世

1　それでも夜を泳いで

自分を裏切らない夕べのために
鯖を　焼き
自分を裏切れないひとのために
投句を　没にする

夜半のコップのなかに　細い根が伸びている

寝返りを打って　ぼくはベッドのまん中を空けてやる

巣のなかの　蜘蛛のために
ゆめのなかの　ネコのために

2　天が割れて

天が割れて
雨が降り
用水路わきの
水かさの増した側溝に
黒猫が倒れている
〈ありのままの姿を見せ〉て

葉むらを騒がせ
急転直下の風が落ちて
雨粒がざざと尋ねる

六月の
お空の　井戸の

魚も野菜も足りていますか

この世に
生まれて
一度だけ
愛されましたか

3　舟は夜のまんなかを越えて

河童の抜きたい
抜かれたい
しりこだまは

たまねぎのかたちを
している　らしい
そりゃあそうだろう
剥いてもむいてもたどりつけない
たましいの橋だからね

母にもらった不安神経症を
うま酒に溶かし
泥人形のケークウォーク
怯えの広場をはるばる渡って
そこへ立ちたい片翼の
朝へタッチ！

（参ったな）わたしに

わたしは（見られている）

半分壊れた世界を映す
落ち込む装置となって
裏山へ洗濯機を回しに
明るく燃えるごみを出しに

## ◆歩行非行

大西隆志

あるけるのがありがたい
歩行をなめるなよ
配給された靴が膝を笑わせる
何を引っ張っているのか
歩いている
雨のあとの泥濘をとぼとぼ
急いでいるわけではないが
せかされているような世界
いちにちは水で始められないのだ
ただようことばの軌跡もみえない
小さな意見を背負っていたが
何処かに置いてきた
生きのびるための祈りは
時間をこえてやってくる
雑兵としてのわたしが
何度もよみがえってくる
殺意はないが
おおくのひとをあやめた記憶は繋がる
石ころが転がっているが
なぜか投げたくない
ナイフはポケットのなか
針金はてのひらを傷つけ
三八式歩兵銃は捨ててきた

とおいきおくのなかなのか
風はさきほどよりはよわくなった
死はさきほどよりはつよくなったのか、よぉ
わたしはひとりではなかったからあいつらを殺れた
しゅうだんのいし、しゅうだんのなかのいしころ
殺れ、殺れなかったら、殺されるだけ
えらいひとをたたえたらくになる
らくすればくはない
見送るはたのはたにいる
へいになるのはにこにこした少年少女
そろいのせいふくにしはいされてもすてきなの
はずれにはずれた
跛行をなめるなよ
匍匐前進はなめられない
いくとは、いくとは
ぜんしんすることなのか
しりぞくことなのか
いっぽぜんしん、にほこうたい
五体投地はまわりまわる
だいちは優しくはない
土は階梯のように積み上げられていく
時は進んでいるのだろうか
誕生草は道端に咲いていた
三百六十五日の花に囲まれて倒れている
あやめたひとの花に囲まれて
何度も歩く人になる
行進する歩く人
逃げる歩く人



## ◆遊泳註解

大西隆志

日差しのなかのなかを
泳いでいる
クロールといった格好良いかたちではない
泳ぐといっても
すいちゅうではなく
革靴やハイヒールの音が響く
街なかのタイル貼りのおおきな通り
泳いでいないと沈んでしまう
四六時中泳いでいる
すいみんちゅうはスイミングスクール譲りの背泳ぎでしのぎ
はたらくひとは泳いでいないと沈んでしまう
暮らしは以前より悪くなって、とことばにすると
するりと葉っぱが落ち
何もかんがえないで泳げといわれる
少しアルコールの入ったフェイクビールで酔っ払い
お笑いは健康の一歩を信じて
手足を動かす
ろーえんどろーう、石は低いところに転がっている
櫂はリックサックに入れていたのに何処かに置いてきたようだ
意志をさらけだして泳いでいる
朔太郎さんも泳いでいたのですか
せいしのさかい
せいりされたしそうの人として
アメリカの鱒釣りから帰ってきたニホンの杣人
泳ぐ人ではないが街中であろうが山中であろうが音をたてながら
が、が、がで身体をほどいているのだ
ゆっくりと一本の糸になっていく
からまることに意味をみいだす

そして、それから、時間をかけてほどいていく
老眼を気にしないで
近視に駄目ださず
しんたいけんさのまいにちを
泳いでいる
シヲオソレナイ、シニタラズにシュクハイ
カンパイ、カンパ、堪忍シテ
泳ぎは下手でも、沈まないこと
沈んでもコクミンとして保護されるのか、アリストノテレマクリ
コクミンを捨て
臣民になって鎮めたのはヨミからの帰り道での
腹腹時計議員の、の、の葉っぱのけむり
すいえいは思想傾向を脱臼させる証文の先へと進んでみる
津波のなかで泳ぐ人
沈まないために命がけだ
はたらくひとは労働者ではなく
うるわしき臣民として
明日を裏切っていくようだ
シンミン日報に尻隠し
日差しのなかのシモジモを
上にして、日々をおさえてみる
骨折、黒説、明日は美しいだろうか
流されていく家屋、図版の表裏の染み
目に自らのいしが入る
塩っぱくない
口からは大量のゲップを吐き出し
溺死の予兆を感じながら
註釈と解説をかかえてみることが必要です
何とか浮いている
地上数センチを進んでいく
うまく進めないが
泳いでいる

# 神戸詞（うた）あしび

81-2014.06.22　大橋愛由等

## そして島民は殺されてしまった

済州島をめぐる二つの事実に深いギャップがある。

韓国有数のリゾート地である現実と、虐殺の島である歴史と。

わたしとって済州島は、学生時代から金石範の小説を読んできた読書体験に影響されて、一九四八年に発生した「四・三事件」によって多くの島民が犠牲となった血塗られ島であるとのイメージがこびりついてる。

「済州島四・三事件」を取り扱った映画「チスル」を観た（オ・ミヨル監督、2012）。

虐殺から逃れるために洞窟で息を潜める済州島のひとたち
「映画パンフレット」より引用

島民三十万人のうち、六万人が殺され、島内の全集落の七〇％が焼かれ、虐殺を恐れた数万人の島民が大阪を中心とした日本に逃れてきた。そしてその中に詩人の金時鐘も含まれていたのである。

この虐殺事件の発端は、日本が一九四五年夏に戦争に破れたあと、朝鮮半島が南北が分断され、南だけの選挙を行おうとすることに対する武装蜂起が済州島で起こり、韓国政府はこの蜂起に南朝鮮労働党が関与しているとして島民らんだ。南朝鮮国防警備隊、韓国軍、韓国警察、朝鮮半島の北部出身の右翼青年団（西北青年団）らが島に乗り込んで徹底して粛清を行ったのである。しかし粛清の対象となったのは南朝鮮労働党とは関係のない島民が殆どだった。

韓国では永くこの「済州島四・三事件」は公に語ることさえタブーであったが、盧武鉉（ムヒョン）大統領が二〇〇三年にはじめて国家元首として済州島民に謝罪。いまは「済州４・３平和記念館（済州市）」といった施設も建設されている。

済州島の島民にとってこの四・三事件はいまだ生々しい体験として刻まれ、記憶が風化することはありえない。政府から語ることを禁じられた時代には「人々は三十年が経つたいまも年々、繰り返されてきた犠牲者のたちの祭祀の席で話を交し、子供たちの耳にタコができるほどにひそかに語り伝えてきたのだった」（金石範「金縛りの歳月」より）

表現されているように、島民と出身者が寄り添う場で語り継ぐことで、虐殺の記憶を確認したのである。

映画は、制作スタッフに済州島出身者が集められたという。すべての島民がなんらかの形で四・三事件にかかわっているだろうから制作スタッフの間にも言葉に出来ない共有されたパッションがあったに違いない。韓国人が自国民を虐殺するというまぎれもない事実をどのように表現するのか、それを済州島にかかわる映画人がなしとげた意味は深く重い。虐殺の事実を忠実に表現しようとすればいくらでも可能と思われるが、この映画は淡々ととある集落の村民たちの行動にスポットをあてることで、ごく普通のひとびとが虐殺されていく事実を観客につきつけることでリアリティを現出させているのである。

映画を見終わったあと、わたしはしばし呆然としていた。ひとがひとを殺す。この時の動機は「アカ」を殲滅するためであった。十代のころ、少しばかり意識が先走って呼ばれていた青年だった私も周囲の心ない同級生たちから「アカ」


詩と評論

月刊『Mélange』VOL.92

めらんじゅ

2014年06月22日　通巻92号
発行所／月刊「Mélange」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F
編集・発行人／大橋愛由等〈『Melange』同人〉
Mobile 090-5069-1840
maroad66454@gmail.com
定価 500円（税込）